

左：Junko Otake, 2011, Collaboration performance 'from T to T' by Junko Otake and Natasha Bailey, Script on Paper

右：Hana Sakuma, 2008, A moment before a quotation mark is closed. Commissioned by London School of Economics and Political Science in Association With London Print Studio, Silkscreen on Paper

ARCHIVE VIEW : 20110110

Artist talk session

Junko Otake and Hana Sakuma
"Where Is Our Language?"

about ARCHIVE VIEW : 20110110

アーティストトークセッション

大竹純子 × さくまはな

「ワタシタチノ コトバハ ドコ？」会場記録写真

>> 案内状テキストより

「ワタシタチノ コトバハ ドコ？」は、英国を中心に活動する大竹純子とさくまはなの最新アーティストトークイベントです。異なるアプローチでアートとコトバに関わっている2人のトークが一つの空間で行われます。タイトル「ワタシタチノ コトバハ ドコ？」は、普段使っているコトバに対してふと感じる「違和感」や「ズレ」「伝えたいのに、言い回しが見つからないもどかしさ」などを表しています。本イベントでは、このようなコトバのもつ役割や働き、それもどちらかという不完全な面にスポットをあてて、コミュニケーションギャップのメカニズムと創造性について探っていきます。

REPORT

アーティストトークセッション
大竹純子 × さくまはな
「ワタシタチノコトバハドコ？」

>> 開催：2011/1/10（日・祝）

>> 時間：13:00～16:00

>> 場所：Port Gallery T

>> ご参加人数：24名



帰国直後に知人に連れられ Port Gallery T へ行って以来、その小さなスペースを最大限に利用して魅力的な展覧会やイベントをされている様子や国際色豊かなアーティストを意欲的に紹介されている様子を見聞きしていたこともあって、東京の 3331Arts Chiyoda で予定していたイベント「ワタシタチノコトバハドコ？」を大阪でも開催しませんかというお話をディレクターの天野さんから頂戴した時にはとても嬉しく思いました。



本イベントは、ロンドンのアートスクールで出会った大竹純子との共同企画で、2人の作品の共通項である「アートとコトバ」をテーマに、現代美術に興味がある人もそうでない人も馴染めるようなプログラム内容と構成になるようにと心がけて行いました。大竹のトークでは、彼女の作品の基本コンセプトである「翻訳」と「転換」のプロセスについて、それから、多様な要素で構成されている最近の代表作品数点について解説を行いました。その後、カナダ人アーティスト Natasha Bailey と共に Port Gallery T とカナダ会場を Skype で繋ぎ、両会場の参加者を交えてお互いの言語をローマ字読みするというライブパフォーマンスを行いました。コンピューター画面を介してカナダから聞こえてくるカタコトの日本語と意味を全く理解しないままにひたすら読み上げられるフランス語で紡ぎだされる「行く宛てのない」会話…この不思議な経験を共有したことによって一気に会場の雰囲気や和やかになりました。私のトークでは、とにかく沢山の作品の画像をお見せしながらアートとコトバについての考察をどんどん紹介するという試みをしました。沢山の断片的なアイデアを並べ立てることによって参加者自身の中で新しい解釈が生み出されることを願いつつお話をさせて頂きました。



大竹と私の作品の中には、英国の文化背景を知ると知らないのとでは作品の解釈が全く違ったものになるものがいくつか含まれており、それらをどのように紹介するかということに最も神経を注ぎ、2人で何度も話し合いを重ねました。ディスカッションは、天野さんの心配をよそに(?)予想以上に盛り上がりました。何より嬉しかったのは、作品の質問はもとより参加者ご自身のリアルな体験や味わい深いエピソードなどが続々と出てきて、それをもとに有意義なディスカッションをすることができたことです。今後も大竹と私は、このようなスタイルで活動を続け、作品と作家だけでなく関わってくださる方々が互いに刺激できるような場を作っていきたいと考えています。ご参加下さった皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。 ● さくまはな



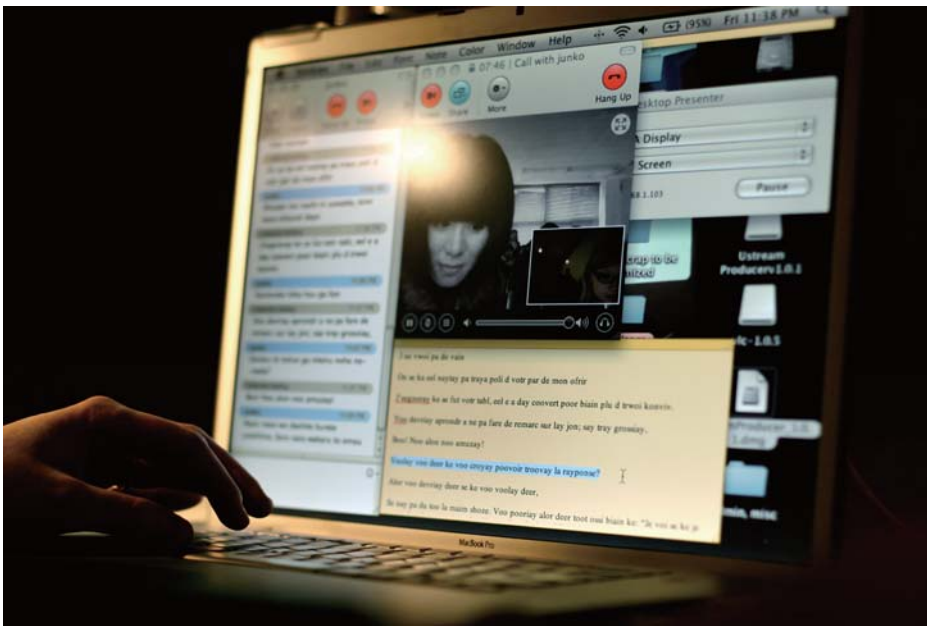
大竹純子 Junko Otake

1979年生まれ。ロンドン大学スレードスクール修士卒業。現在、ロンドンを拠点に制作活動を行う。翻訳、解釈、変化を基本コンセプトとして、プロセスを再現するような実験的なインスタレーションを中心にサウンド、16mmフィルム、パフォーマンス、版画などによる作品を発表。また、アーティストや作曲家、ミュージシャンらとのコラボレーションも積極的に行う。

作家ホームページ junkootake.com

さくまはな Hana Sakuma

1970年生まれ。ロンドン芸術大学チェルシーカレッジ博士課程修了。長年の英国滞在中で培った日本人英語とミステイクを題材にインスタレーション、英語を用いたテキストワークなどを作成。活動の一環として、国際アートシンポジウム Art of Research: Research Narratives 2008 など英国にていくつかのシンポジウムの企画運営にコメンターとして関わる。2010年に帰国し、現在、関西の大学に勤務。ここでのトークイベントが帰国最初の発表となる。



2011年1月15日 / 3331Arts Chiyoda / Photo by Susy George Hart



>> Point of view >> 森下明彦

イギリスを活動の場としてきた2人による、1日だけの催し。「コトバ」を主題に、作品展示、カナダとの同時中継パフォーマンス、そして作家トークが行われました。

さくまはなさんが言葉にこだわって発想するのは、長期に渡る異国での生活体験からです。例えば日本人にとって発音が難しいとされる「L」と「R」の相違を、アルファベットの形をしたパスタの中からそれらを抽出・区別する作業に置き換えることがそうです。

彼女の別の作品に、口頭でしゃべったことを手指で引用符に入れるという動作（その言葉を括弧に入れることを意味します）に依拠したものがありました。恐らく日本では理解困難でしょう。つまりコミュニケーションにおいて言葉以上に厄介なのは、このような身振りや他人との距離の取り方

など、非言語的なもの。その場の文脈に依存し、説明が難しく、文化という隠れた次元に根差しているからです。

現代の美術にとって重要な問題の1つは、広い意味でのコミュニケーション。美術はそれに美術ならではの独自の仕方を取り組みますが、その独自性こそ非言語的なものとの親和力です。二人の仕事が展開し、そうした身体言語にも真正面から取り組むことを希望します。

森下明彦（メディア・アーティスト／美術愛好家）：美術大学教員を昨年で退職し、現在は美術と映像に関する研究を続けながら、美術資料室（神戸市）の開設公開を準備中。また、国立国際美術館客員研究員として「中之島映像劇場」と名付けた映像上映会を企画。来る3月26日、27日に第1回、「美術と映像」を開催しますのでご高覧下さい。詳しくはチラシ、ないしは、次ぎをご参照：<http://www.nmao.go.jp>



松本俊夫「銀輪」（1956年／12分／カラー／サウンド）

>> Point of view >> 井尻貴子

ワタシタチノコトバハドコ？

冬のある日、この問いに出会った。少しずつ、考えはじめた。

言葉に関する活動に携わってきた。たとえば、視覚に障害のある人との美術鑑賞活動。あるいは哲学カフェ。決して話すのが得意なわけではない。むしろ苦手だと思う。言葉がうまく、伝わらない。そう思うことも少なくない。にもかかわらず、そのような場に足を運ぶ。

互いに解さない母国語を読み上げる大竹純子とナターシャ・ベイリーのパフォーマンス。アルファベット型パスタから発音がままならないLとRを拾

い集めたさくまはなの作品。それらは、伝わらなさをはらみながら、他者へと差し出される。そしてそこで、いま伝わる意味を、分泌していく。そうなのだ、と思う。言葉の意味はいまここで生まれるしかない。言葉はうまく、伝わらない。それでも、私たちは言葉を手放すことはできない。言葉による鑑賞も、哲学カフェも、私たちはそこで、言葉の可能性を追い求める。しかしそれは同時にその不可能性を感じることもである。私たちの言葉はいつも多すぎて、少し足りないのだ。しかし、なお、伝わらないことを伝わらないままに伝えようとする。そのとき、現れる言葉があるとしたら。それが、私たちの言葉となるのかもしれない。そんな言葉と出会いたくて、私はそのような場に足を運ぶのかもしれない。

井尻貴子：大阪大学大学院文学研究科（臨床哲学）博士前期課程修了。2004年より2年ほど視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞活動を行うグループMA Rの事務局を担う。2010年より財団法人たんぼの家職員。また、「社会」のなかで「生きる哲学」を探究する団体、カフェフィロの一人として「哲学カフェ」などの対話の場をつくる活動も行っている。



ライブペインティングイベント「言葉のスケッチ」。『雲の手触り』をテーマとした参加者の対話をもとに、その場で作品を制作していく全盲の美術家、光島貴之さん（2011年2月27日／アトリエB1／主催：大阪大学 CSCD）

1日かぎりの特別プログラムでスタートした2011年。参加のきっかけや関心を持たれた理由が実に様々だったこともあり、立ち会ってくださった皆様と共につくりあげていく興味深い時間になりました。そこで、ご参加くださったお方より本プログラムに連なる文章を寄せていただきました。

EXHIBITION >>2011



>> 1/31 (月)~2/12 (土) WORKS#05 『White and Black and...』



>> 2/14 (月)~2/19 (土) 桐本美知子 『obscure』

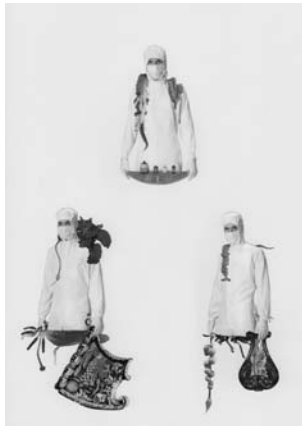


>> 2/21 (月)~3/5 (土) 北村和也 『篝火』

↓
↓



>> 3/7 (月)~3/19 (土) 奥村里菜 『tracing』



春のギャラリー企画展

>> 3/22 (火)~4/16 (土) 上野王香 『offering』

* 展覧会詳細・今後の予定はHP またはお電話でご確認下さい

PROJECT

今年「STUDENTS : PROJECT」をスタートしました。学生の展覧会を意識をもって展開しようとした経緯は、これまでに登場した彼らの展覧、発表までのプロセスを近くで見ながら、とても面白く、逞しいものを感じたからです。まだ途上で、荒削りな部分が見えることもありますが、それらをはねのけるチャレンジや瑞々しさは、私たちの体温をあげてくれるものでした。昨年秋に初個展を開催した小川美緒も、興味深い展覧を見せた一人です。作品『FAMILYFORM』は、女だけの家族に正面から向き合う、立ちふさがり、投影する、独自のポートレートで構成されます。等身大のプリントに囲まれると、写真だからと指をさすことができないうリアリティーが現前します。会期中に課題をつかみ、次の目標の話を語り合う等、互いに刺激を受け合うことにもなりました。未知の可能性を持って登場する展覧会に、ぜひ立ち会っていただきたいと思えます。



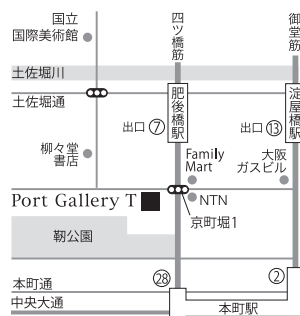
Mio Ogawa
『FAMILYFORM』, 2010
Inkjet print, 181×90cm

編集後記

扉をあける愉しみ、期待感が行き交う場所でありたいと2007年に開廊しました。積み重ねの日々の中、登場する作家たち、足を運んでくださるお客様が空間を生きづかかせてくださいます。この1枚も、アートを入口に多様な風が吹き込まれるアーカイブレーターになればと準備号の発行です。当レーターの編集制作に興味のある方は、ぜひ、ギャラリーまでご連絡ください。(天野)

Port Gallery T

〒550-0003 大阪市西区京町堀 1-8-31 安田ビル 1F
Tel/Fax : 06-6185-3412 www.portgalleryt.com



地下鉄のご案内
四ツ橋線「肥後橋」7番出口より徒歩5分
御堂筋線「淀屋橋」13番出口より徒歩8分
国立国際美術館より徒歩10分

COLUMN

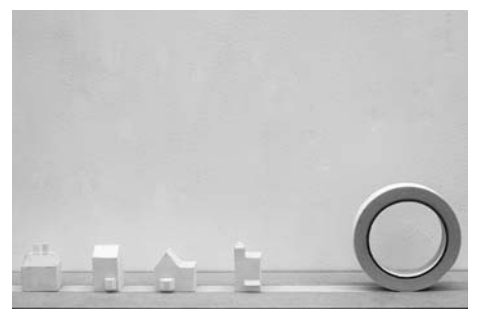
>> 「対話」のはじまり

天野多佳子 (ディレクター)



これまでに「対話」と題するトークを、ジョミ・キム、檜橋朝子、鷹野隆大の3氏各々と開催しました。作品を見るという体験は、とても個人的なことで、「作品」と「見る人」との「あいだ」で起きている何かをひとまず「対話」と名付け、ディレクター自身が、いち鑑賞者・インタビュアーとなり作品世界をめぐるというものです。自分が被験者でありながら大いに偏見を語るという、個人的に過ぎるとお叱りをうけかねないプログラム。そのようなものをやりたくなってきたきっかけは、第1回目に登場するジョミ・キム (金朝美) との出会いでした。

ジョミはイギリスでファインアートを学び、海外で発表を重ね2007年に日本へ戻ったアーティストです。ある日届いたグループ展の案内状に添えられた「きっと楽しんでいただけることでしょう。」の一言が目にとまり実際に会場へ。そして思わぬ楽しみ方と遭遇することになりました。多様な側面をもつ芸術のなかで「楽しい」を入口にした作品だってもちろん存在します。用いる素材・題材が日常に繋がっていることもあり、作品はとても親しげに差し出されます。仮留用のマスキングテープで作られた指先ほどの家の行列、地面を這うアルミホイルの花束、毛髪で描かれた1本の木、赤い実のイメージとサウンドピースの循環。それら有機的な空間には、ジョミが日々の生活の中から抽出した「疑問」なり「ルール」なり、仮説の柱がきちんと立ち上がっていて、私たちが前提として成立させている日常を、そっと揺さぶります。その揺さぶりはユニークで、また人の生き方に非常に真摯で愛情すら感じます。これまでに何度となく「凝り」をほぐされてきました。なぜなら、目の前のあたりまえのような生活に、もうひとつの扉、もうひとつの見方に気づく感性が、そもそも私たちにもあることを思い出させてくれるのですから！ そんな作品をもっと引き寄せて体感してほしいと「対話」プログラムを開催しました。当日は、作品世界の「神話」にシンクロさせて鬼瓦職人さんをゲストにお招きしたのもジョミの発案でした。「Finding Art in Dairy Life! 」と話すジョミのこれからも、お楽しみに。



Jomi Kim, 2007, Pre-Fab, Masking tape, Dimensions Variable